

Sufficient Grace～悲しめる者にこそ～

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

<前編>

○ 病院のナースステーション

藤田看護婦 はい、どうなさいました？…はい、すぐ行きますね。

菊池絵里子 どうしたの？ また斉藤さん？

藤田 ええ、また頭痛ですって、ほんの 30 分前にお薬飲んだばかりなんですけど。

絵里子 不安なのよ。話聞いてあげるだけでも違うものよ。いいわ、今度はわたしが行くから。

藤田 すみません。

ナレーション わたしは菊池絵里子。この市立病院の外科病棟に勤めて 10 年になる中堅看護婦。新人看護婦を指導したり、管理職からは頼りにされて、業務に振り回される忙しい毎日。けれどもやりがいのある仕事だし、何と云っても、理解のある優しい夫がいつも励ましてくれる。毎日が充実してる、幸せって言えるんじゃないかな。…ひとつのことを除いては。

○病室

絵里子 斉藤さん、入りますよ。

斉藤 ああ、あんたか。

絵里子 頭痛のほう、少しは良くなりました？

斉藤 ダメだね。あの薬は効かんよ。

絵里子 まだ飲んでから、それほどたってませんしね。もう少し待ってみましょうか。習慣になるとよくありませんから。

斉藤 …何飲んでも効かんよ。

絵里子 どうして？

斉藤 まったく頭の痛いことばかりだ。

絵里子 え…？

斉藤 頭の痛いことばかりだっていうの。看護婦も病院も何もかも。

絵里子 何もかもって…。何かあったんですか？

斉藤 いや…。菊池さん、あんた子供はいるかね？

絵里子 え、…まだいませんけど。

斉藤 子供のいないあんたにはわからんよ。

絵里子 …。

斉藤 もういいよ。ありがとう。

絵里子 お薬は……

斉藤 いや、もういいよ。寝てみる。薬中毒になっても怖いしな。

ナレーション 病院には、斉藤さんのようなわがままな患者さんが、必ずと言っていいほどいる。わたしは嫌な気分で家に帰った。

○ 夜、絵里子の家のリビング
(夫がサッカー中継を見ている。)

絵里子 それでね、子供がいないやつにはわからんだろ、みたいに言われちゃってさ、もう頭にきちゃった。別に子供が嫌いであつくりたくないわけじゃないわよって言い返したかったけど……。ね、聞いている？

夫祐二 聞いているよ。…あーあ、惜しいなあ、ちゃんとねらって蹴れよなあ。

絵里子 ウソ、聞いてない。サッカーばかり。(テレビを消す)

夫 何だよ、消すことないだろ。

絵里子 あのね、祐二。来月の休み、伊豆に行くことにしたから。

夫 伊豆？ この前、箱根に2泊したばかりだろ？

絵里子 いい温泉があるんだって。今度こそ子供ができると思うの。

夫 そんなこと言ったって、会社休み取れるかわかんないよ。

絵里子 ダメよ、何のために有休があるのよ。もうホテル予約取ったんだから。

夫 ええー？

絵里子 休み取ってよ、絶対ね。

夫 ちょっと、ちょっと待ってよ。

絵里子 それがホテルのパフレット、サウナもあるのよ。お料理も豪華だって。

夫 人の話聞かないのは、絵里子のほうだろ？ もう……。

ナレーション そう、わたしがただ一つ気に病んでいるのは、子供がいないことだった。夫とわたしは結婚して5年になるのに、まだ子供ができないのだ。わたしも30歳を超え、実家の親も心配したのか、よく電話をかけてくる。毎日幸せではあったが、子供がいないという事実は、いつも心に重くのしかかっていた。

○ 公園

ナレーション 何となくぼんやりしたいとき、わたしはよく近くの公園でブランコをこいでみる。その日曜日わたしは、ブランコを揺らしていた。夫は会社の接待ゴルフで呼び出されて、留守だった。

健哉 絵里子おねーちゃん。

絵里子 あ、健哉君

ナレーション 健哉君は近所の小学生の男の子。小さい時からキリスト教の教会学校に行っているようだ。

健哉 お姉ちゃん、今日は、病院お休みななの？

絵里子 うん。健哉君はどこ行ってたの？
健哉 教会。
絵里子 そっか。今日日曜日だもんね。毎週行ってるの？
健哉 うん。
絵里子 偉いんだ。ね、何習ってきたの？
健哉 お祈り。
絵里子 お祈り？ ふうん…。ねえ、何お祈りしてきたの？
健哉 いろいろとね。大きくなったらプロ野球の選手にして下さいとか、おばあちゃんのヒザの痛みを治して下さいとか…。
絵里子 いっぱいあるのね。お願いが。
健哉 うん。でもね、みんな聞かれるわけじゃないんだって。
絵里子 そうなの？
健哉 うん、神様のみ心にかなったお祈りしか聞かれないんだって。
絵里子 ミココロ？
健哉 絵里子お姉ちゃんのこと、お祈りしてあげてもいいよ。
絵里子 ほんと？ じゃ、絵里子お姉ちゃんの家、赤ちゃんが産まれるようにお祈りしてよ。
健哉 いいよ。じゃ、またね。
絵里子 バイバイ。
ナレーション わたしは、この小さな子がイエス・キリストを神様と信じて、わたしのためにも祈ってあげると言った、その単純な信仰心に内心驚いたが、そんなこと、すぐ忘れるんだろうと思っていた。当のわたしは、キリスト様でも、おしゃか様でも、この際だれでもいい、赤ちゃんを授けて下さい、とワラをもつかみたい気持ちだったのだ。

ナレーション それから2か月ほどたって、大好きなアジサイの花が青く色づくころだった。健哉君のお祈りが効いたのだろうか。この5年間、何度も何度も夢に見ていたことが、ついに起こったのだ。

○夜、絵里子の家

夫 ただいま。
絵里子 お帰りなさい。
夫 あれ、どしたの？ やけに機嫌いいじゃない。
絵里子 うふふ。あなた、お仕事お疲れさま。
夫 何？ 気味悪いなあ。わ、すごいごちそう。
絵里子 お祝いなの。
夫 何の？

絵里子 やだ、鈍いのね。…できたの。
夫 何が？
絵里子 決まってるでしょ。
夫 え、ホント？
絵里子 ほんとよ。市販の試験テープで陽性だったんだから…。
夫 やったー、ばんざーい。よかった、絵里子、ほんと、よくやった。そう
だ、今度の夜勤、早く替わってもらえよ。体大事だからな。
絵里子 そう簡単にはいかないわよ。次は無理だけど、来月の勤務から替わって
もらえると思うわ。
夫 なら、いいけど。あー、何か急に腹減っちゃったぞ。早く食べようよ。
絵里子 あ、まず手を洗ってきてください。
夫 はいはい、わかりました。看護婦さん。
絵里子 ま、今日は聞き分けがいいこと。
2人 (幸せそうな笑い)

○診察室

ナレーション 翌日、早速わたしは勤務先の病院の産婦人科を受診した。産婦人科の山
本先生は、信頼がおけると評判だった。そう言えば、山本先生もクリス
チャンという話だ。
絵里子 先生、どうでしたか？
山本 うーん。一応、妊娠反応は出てるんだけどね。
絵里子 一応って…
山本 うん、反応はあるんだが、計算では5週目にはいるのに、超音波に赤ち
ゃんが映らないんだよ。
絵里子 え…？
山本 赤ちゃんの心音も聞こえないし。
絵里子 ……。
山本 まだはっきりしたことは言えないんだが、子宮外妊娠の可能性もあるな。
絵里子 子宮外妊娠って、だって痛みはありませんよ。
山本 うん、もう少し様子を見ないとね。
絵里子 様子…。
山本 うん、来週また診察するから。それまで余り無理をしないで…。
ナレーション その後の山本医師の言葉は、半分も聞いていなかった。頭の中が空っぽ
になった。夫に何と言おう。優しい夫の笑顔が目には浮かんだ。あんなに
望んでいた赤ちゃんなのに。赤ちゃんは生きてるんだろうか。それとも
…。自分の体の中で起きていることなのに、自分では何もわからないし、
どうにもできない。それがたまたまなくもどかしく、悲しかった。

○ナースステーション

ナレーション 診察を受けて2日後の夜勤は、手術患者がいて忙しく、仮眠を取る暇もないほどだった。12時を過ぎたころから、吐き気が込み上げ、それまでかすかだった下腹部の痛みが規則的に強くなってきた。

絵里子 痛い…

ナレーション まだ新人の藤田さんには全部は任せ切れない。先生からもう少し指示を受けておかなくちゃ。そう思って、わたしは必死に痛みをこらえていた。

医師 はい、菊池さん、この点滴こっちに変更するから。

絵里子 …はい。

医師 あれ、菊池さん、何だか顔色悪いよ。

絵里子 大丈夫です…。うう…。

医師 あ、おい、菊池さん。藤田さーん、ちょっと来て！ 菊池さん、おい。

藤田 菊池さん、菊池さん…。

ナレーション わたしは、激しい痛みでその場にうずくまってしまった。その夜、わたしは流産した。夢に見た小さな命は、永遠にわたしの目の前から消え去ってしまったのだ。

<後編>

ナレーション わたしは菊池絵里子。市立病院に勤めて10年目の看護婦。仕事も順調、結婚して5年になる夫ともうまくいってる。そんな充実した毎日だったけれど、子供がいないのが、唯一の悩みだった。それが、やっと子供が授かったのも束の間、勤務中に流産してしまったのだ。

○絵里子の家（電話が鳴る。）

絵里子 はい、菊池です。

よしえ （フィルター音）あ、絵里子？ わたし。どうしてた？

絵里子 よしえ？

よしえ 聞いたよ。大変だったね。体のほう、大丈夫？

絵里子 大丈夫。すっかりいいんだけど、マイっちゃった。

よしえ 残念だったね。絵里子、何にも悪いことしてないのに、こんなことになって…。

絵里子 心配かけてごめん。もう、大丈夫だから。

よしえ 声聞いたら安心した。絵里子には優しいだんなさんもついてるんだし、めげずにまた頑張るんだよ。

絵里子 ありがとう。

よしえ ね、こないださ、テレビの特集で見たんだけど、方角とか関係あるんじゃない？ 病気ばかりしてる人で部屋の向きが悪かったとか、聞くじゃ

ない？

絵里子 ごめん、よしえ、まだちょっと疲れてるから…

よしえ あ、ごめん、また電話するから、これで切るね。

絵里子 うん。電話、どうもね。(電話を切る音)

ナレーション 電話は同僚のよしえからだった。心配してかけてくれたのはうれしかったけれど、何か煩わしかった。結婚してないよしえには、わたしの気持ちはわかるはずがない。それから1週間ほどして、わたしは勤務に戻った。体の方は、すっかり元通りになっていたが、夫にもわかってもらえないだろう深い喪失感が、わたしを苦しめていた。

○病室

絵里子 斉藤さん、はい、退院のお薬です。退院して最初の受診は、2週間後の火曜日に…。

斉藤 菊池看護婦さん、もういいのかい？

絵里子 え…？

斉藤 いや、ちょっと小耳に挟んだものだから。大変だったね。

絵里子 ご心配をおかけしまして。

斉藤 看護婦さんには流産が多いっていうけれどね。体大事にしてくださいよ。

絵里子 はい。

ナレーション わたしは斉藤さんの顔を思わずのぞき込んだ。あんなにわたしを困らせた人なのに。その優しい言葉に、思わず胸が熱くなった。同僚も外科の先生たちも、みんな心配してくれた。でも、人々のそんないわりと優しさが、今のわたしには余計こたえた。そして、無性に悔しかった。どうしてわたしなの？ なぜわたしが流産しなければならないの？

○公園

ナレーション 翌日の土曜日、夜勤明けのわたしは、いつもの公園で、独りブランコを揺らしていた。親子連れが楽しそうに遊んでいる姿を見ているうちに、涙が流れてきた。その時だった。

山本 あれ、菊池君じゃないか。

絵里子 あ、山本先生。

ナレーション 目の前に立っていたのは産婦人科の山本先生だった。慌てて涙をぬぐった。

絵里子 どうなさったんですか、こんな所で？

山本 ああ、ちょっと待ち合わせでね。そう言えば菊池くん、仕事再開してるんだって？ もう体の方はいいのかい？

絵里子 ありがとうございます。おかげさまで…。

山本 そう、よかった。…ああ、ブランコか。何だか久しぶりだな。どっかい

しょっと。おととと…。

ナレーション 勢いよくブランコに腰掛けて、弾みで後ろにそっくり返りそうになった山本先生の姿に、わたしは思わず笑ってしまった。

山本 や、笑ったね。その方が君らしくていいよ。

ナレーション わたしはしばらく、先生とブランコに揺られていた。2人とも無言だった。

山本 …「わたしの恵みは、あなたに十分である」。

絵里子 え…何ですか？

ナレーション ポツリと言った先生の耳慣れない言葉に、わたしは一瞬聞き返した。

山本 ああ、これは聖書の中の言葉なんだ。パウロという人が書いた手紙にある。神様の恵みは今のあなたに十分だ、ってということなんだけどね。

絵里子 そのパウロって人、よっぽど恵まれた人だったんですね。

山本 ところがそうじゃないんだ。パウロは、どうしても取り去ってほしいと神様に願っていたものがあつた。目の病気じゃないかという説もあるんだが、病気を抱えていたんだね。それにね、彼はキリストのことを宣べ伝えるために牢屋に入れられたり、船が難破したり、いろんな迫害にあつたりしたんだ。ずいぶんと苦しい生涯だった。

絵里子 何か、かわいそう…。

山本 うん。たしかに自分の力では、どうにもならないことは多いね。突然の事故とか、いやされない病気とか。もう生きてるのが嫌になることさえある。わたしの家内がリュウマチにかかった時もそうだったなあ。

絵里子 え、それで奥様は今もまだ？

山本 うん、もう 20 年になるかなあ。一生治らないだろう。結婚したばかりだったよ、発病したのは。病気もそうだが、子供を望めない体だと知った時、本当にかわいそうだった。「神様、どうしてですか？」って、何度泣いて問いかけたかわからない。僕も若かったからね、夜中、悩んで牧師の家に押しかけたこともあつた。そんなときにね、さっきの聖書の言葉に出会ったんだ。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである。」 神様から、まるで直接語りかけられたような気がして、本当に慰められた。この言葉には続きがあつてね、「ですから、わたしは、キリストの力が私をおおうために、むしろおおいに喜んで私の弱さを誇りましょう。』とあるんだ。

絵里子 弱さを誇るなんて…。

山本 人は健康だったり物事がうまくいっているときは、自分は強い、万能だと思いがやすい。神なんか必要ない、と思ってしまうだろう。けれど、本当に人は強いんだろうか？ 万能なんだろうか？ いや、そうじゃない。

自分の健康も、命も思い通りにできないんだから。まして、新しい命を生み出すことなどできるわけがない。菊池さん、女性の体内で人をかたちづくられるのは、命を吹き込まれるのは、まさしく神、そう、すべてのものをつくられた全能の神様の業なんだよ。神様の最前のご計画に従ってね。わたしたち夫婦には、神様はその新しい命は与えられなかった。我々の結婚生活は、だから言ってみれば、家内の病を通して、神様が何を教えようとしておられるのか、夫婦で探し求めてきた歩み、というところかな。わたしはそのころ、外科に進もうか、産婦人科にしようかと迷っていたんだが、それを機会に迷わず産婦人科をやろうと心に決めた。同じような悩みや病を持った人を、一人でも多く助けてあげたいと思ったんだ。わたし自身は至って丈夫にできてるから、こんなことでもなければ、病む人の気持ちなんか、生涯分からなかったかもしれないな。それが、最も身近な人が病んだことで、人の痛み、苦しみを少しは理解できるようにされたし、いたわり合い、支え合って生きていく、夫婦のきずなというものを、身をもって教えられた。だから今は、神様の恵みは十分だったと、心から言えるんだよ。

絵里子 …わたし、そんな風に考えたことなかった…。

ナレーション その時、子供の声がした。

健哉 山本さんのおじさあんな。

ナレーション 見ると、健也君が走ってくる。

絵里子 ああ、山本先生、健哉君と知り合いなんですか？

健哉 うん、僕とおじさんは教会の友達なんだ。今日はおじさんのうちに電車の図鑑を見に行くの。

絵里子 へえ、そうなの。

山本 じゃ、また。何か柄にもなく熱弁ふるっちゃったけど…。

絵里子 いいえ、ありがとうございました。…あ、わたしも聖書読んでみたいんですけど。

山本 そう？ よし、それじゃ一冊贈呈しよう。

絵里子 本当ですか？

健哉 ねえ、早く行こうよ。おじさん。

山本 今行くよ。それじゃ元気でね、菊池さん。神様の恵みは、あなたにも十分なんだよ。きっとまた赤ちゃんは授かるから。

健哉 じゃあね、絵里子おねえちゃん。

ナレーション わたしは、心に一筋の望みのようなものを感じながら、二人を見送っていた。すると、手を振って立ち去りかけた健也君がまた駆け戻ってきた。

絵里子 何、健也君？

健哉 お姉ちゃん、僕、お祈りしてるからね。あ・の・こ・と。

ナレーション 健也君は覚えていてくれたのだ。わたしに赤ちゃんができるように、まだ祈っていてくれていたんだ。

絵里子 ありがとう。健也君。

ナレーション 熱いものが込み上げた。わたしは、思わず彼の両手を握り締めていた。

○ 絵里子の家
(夫、またもサッカー観戦。絵里子がテレビをパチンと消す。)

夫 あれ、いいとこだったのに。

絵里子 早く寝ましょ。明日は二人で行くところあるんだから。

夫 え、日曜日に早起きしてどこ行くんだよ。

絵里子 教会よ。

夫 教会？ 急に何だよ。このところずっとふさいでたのに、生き生きしちゃって。どういう風の吹き回しだい？

絵里子 「わたしの恵みはあなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」

夫 あん？ 何だよそれ。

絵里子 聖書の言葉。明日はね、それを確かめに行くのよ。じゃ、一足お先に、お休みー。

夫 おい、絵里子…？ わかんねなあ。

ナレーション あきれたような夫の顔をしり目に、わたしは寝室のベッドに潜り込んだ。目を閉じると、山本先生と健哉君の声が心に響いてくる。

山本 (エコー) 神様の恵みは、あなたにも十分なんだよ、菊池さん。

健哉 (エコー) お姉ちゃん、僕お祈りしてるからね。

ナレーション わたしよりずっとつらいところを通ってきたのに、どうしたら、あんな風に思えるんだろう。どうしたら、あんなに単純に信じて祈れるんだろう。聖書の中にその答えがあるような気がする。これから教会で、夫と一緒に神様を探してみよう。神様がわたしにも声をかけてくれたら、今の悲しみと寂しさが喜びに変わる日が、本当に来るかも知れない…。

<完>
